綴りの輪 ⑥⓪

飯田大学の夢を描いた 宮沢芳重と小塩完次の交流 下

（1898－1997）（1897－1992）

小塩立吉

『教育的見識者諸賢へ』と言うガリバン刷り資料を送ってきている。同8月2日飯田での会議出席が最後の旅となった。

6月22日文京区千石2－1－6氷川下セッツルメント病院19号室に入院したが、いよいよ病状悪化、11月5日付看護婦さん代筆で速達葉書を完次宛に送り急いで会いたいと訴えている。

完次が病院に赴くと、「ぼく 生命は終わる…」と宣言し遺言を伝えた。内容は公刊書に詳しくこれらに譲る。白菊会への献体手続きが肉親の印が得られず困り、急いだのである。宮沢氏は夙に1966（昭和41）には白菊会の規則を検討したとされ、一方、とよ子も白菊会への献体を考え実行したが、自宅訪問の際その話が出たものと思われます。

宮沢芳重氏は、1949（昭和24）年には完次に誘われ東京で世界連邦の講演会を聴講し、また神稲や生田中学での小塩完次の講演を聴いている。飯田を訪れる際には父小塩禄郎を数回にわたり訪れ、松井卓治市長、池田寿一図書館長、市役所の座光寺久夫助役などへのとりなしを依頼していたことが短文日記にある。

武蔵野の自宅に正月何度も訪ねた中で写真が残るのは次の2回である。

1970（昭和45）年6月20日の完次宛私信には体は既に病にむしばまれ、焦りの色がにじみ、葉書の後さらに電報を受け、とよ子が再訪、遺言の再書き取り、特にドイツ語本2冊をKさんに送るようにと命令を受けた。その後これらは無事発見されKさんとも連絡が取れ現在図書館保存されている。

最期を迎えた前後に完次は、手許の広告の裏紙に次の4首を詠んでいる。

共産党の　病院に臥し
成田山の　お守り封の
まま　君みまかりぬ

青刈りの　頭はもはや
見えずなりぬ　淋しく
もあらむ　我が家の元
旦

生命は　終わると宣らし　芳重き　白菊会への　手続き急ぎぬ

付添婦　性に合わぬは
取り替えて　安らかな
君　みまかりにけり

また氏が亡くなってからと思われるが、次の二首を葉書の端に残している。

錠前の　掛かれる戸口
ふと見れば　二三輪菊
の　供えてありぬ

その本の　神田の店の
紙のまま　出できてそ
ぞろ　君し偲ばゆ

少年時代勉学の機会に恵まれず無念の月日を過ごしたが、苦学して東京に出て物理や工学系の高い知識を得て五島光学、運輸省航空高の技術畑に一時職を得た事が記録されているが、独特の人柄の故か長続きはしなかった事が覗える。

その後日雇い労務者をしながら図書館に本を贈り、東京天文台報を購読し、予備校の研数学館に通い一生勉強し続けておられた。

故郷の若者に天文に興味を持って貰おうと飯田高校に望遠鏡を贈るべく寄付を続け、その志が伊那飯田の心ある人を動かし第1世代の天体望遠鏡が実現した。

時は下って、飯田高校新校舎の建築に際し新望遠鏡ドーム建設の話が起こり、多くの篤志家の思いが再度実りつつあった。私ども小塩完次親族は、1996（平成8）年6月叔父遺産の一部からある金額を寄進したことであった。その他篤志家、同窓会各位の寄付により第2世代が完成した。

氏は郷土に大学を作ろうと飯田図書館に本を贈り続けたが、大学設立運営・財政規模の観点では、夢と現実の隔たりはあまりにも大きく、志は受け止めても誰も答えを出し得なかった。

ここ数年、法政大学国際文化学部学部長高柳俊男教授が宮沢芳重氏に着目され、夏期セミナー「学輪飯田TIDA」のテーマとして取り上げて頂き、さらに2013（平成25）年7月6日法政大学主催でシンポジウムが開かれ筆者もパネラーとして招かれた。

少子化の現実の前に初代天体望遠鏡を展示する松川東小学校は、統廃校問題に直面しており、芳重地蔵も訪れる人が少なくなろう。

今までの故郷生田地区松川町の皆様の長年のご尽力に深く感謝すると共に、伊那飯田人にとって風化しかけている、この反俗の郷土の偉人の志を語り継ぎ、今後の保存なども考えて行きたいものである。

◇　◇

*こしお　たつきち

1936（昭和11）年生まれ。飯田市出身。一般財団法人日本禁酒同盟事務局長。東京都日野市在住。

1963（S38）.1.1　小塩完次宅にて升平（甥）、小塩完次、喜重、とよ子（弟）、宮沢芳

1962（S37）.1.1　小塩完次宅にて喜男（完次妻）、宮沢芳重（弟）、とよ子（姪）、完次、

東京都武蔵野市西大久保
小塩　克次　様
45.11.6
今、セッルに入院中です。
それで急に用事があります。すぐ病院の方にきていただけるでしょうか。
おねがいします。
もしこれなかったら電話でも下さい。
病院（九四四）九七四一。

宮沢芳重氏が小塩完次に逢いたいと訴える速達葉書
1970（昭和45）11.5 看護婦代筆